

『ヒーロー観察記』 - めげ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

『ぐははははは！ たった今からこの公園は、ユガンダ様の部下である、テレッテ星人ワルモンの支配下となった！ お前達くそガキは俺様の下僕だ下僕！ おらおらブランコから退きやがれ！』

『うわーん。変なギョロ目が僕たちの公園を独り占めしようとするーっ！』

『ぐははははは。泣け、叫べ、喚け！ おいそこのお前、オレンジジュースを買って来い！ いいか、果汁百パーセントのやつだからな、三十パーのやつなんか買ってきたらタコ殴りにするぞコラ！』

『うわーん、うわーん！』

『そこまでだ、テレッテ星人ワルモン！』

『はっ。そ、その声は！』

『熱血のレッド！』

『鉄拳のグリーン！』

『冷静沈着ブルー！』

『彩度低しドドメ色！』

『くそう、無敵戦隊めが！ いつもいつも邪魔しやがって！ あ、止め——ぐふっ！ こら、弁慶の泣き所は反則だろ！ 小指もダメだって！ ちょ、さすがにそれはむごい——ぎ、ぎゃああああああ！』

「もうやってらんねえよ！ 俺は降りるからな！」

基地に入ってくるなり、グリーンが声を張り上げ、木製の机に拳を叩きつけた。さすが鉄拳のグリーン、分厚い机が見事に真っ二つだ。だが部屋で唯一の机を壊したら後々困るのではないか。まったく、考えなしの阿呆というのはこれだから。

「おいグリーン落ち着けよ。つか机壊すなよ、また用務員さんに怒られるだろ？」

レッドがたしなめるように言う。どうやら机は何度も壊れているらしい。限りある資源を無駄遣いするなど、ヒーローとしてあるまじき姿だ。

「どうしたんだよグリーン。一体今度は何に怒ってるんだい？」

戦隊一の異色——というか奇色の、ドドメ色が眉をひそめてグリーンに尋ねる。グリーンは鼻をフンと鳴らすと、忌々しげに吐き捨てた。

「ずっと疑問に思ってた。なんでレッドが、このチームのリーダーなんだよ？」

「え？ だって俺、レッドだし」

きょとんと返すレッドに、グリーンは鼻が触れ合うくらいにまで詰め寄った。

「だからなんでレッドだとリーダーになるんだよ、意味不明じゃねーか！」

「って言われても……あ、ほら。俺、熱血キャラだし」

「俺だって十分熱血キャラでいけるだろっ。別に熱血はお前の専売特許じゃねえっ。つか、お前実は自分で言うほど熱血キャラじゃねーだろ！」

それは私も同感だった。レッドは熱血というよりただの馬鹿だ。しかもとことん馬鹿ならばまだしも、中途半端に馬鹿だから始末に困る。もっとキャラというものを考えればいいのに。この馬鹿めが。

レッドも痛い所を突かれた自覚はあるのか、顔をしかめてグリーンを突き放した。

「ああもう、いい加減にしろよ。自分がリーダーになれないからって、俺に八つ当たりするなよな！」

「んだとっ？ もうっぺん言ってみやがれ！」

グリーンがグッと拳を握った。いい加減キレそうだ。そうなれば、ぶっ倒れるまで殴りあってから、夕日に向かって走り出すに違いない。青い春というやつか。

「まあ待て」

沸点まで行きかけたグリーンを冷ましたのは、ブルーの冷静な声だった。部屋の隅に佇みながら、静かに視線を送っている。わざとらしいキザな立ち方も、ブルー

ならば自然に見えるから不思議だ。

ブルーは腕を組み、壁に背を預けたまま続けた。

「落ち着けグリーン。レッドがリーダーになるのは古来よりの伝統、宿命だ。俺たちがいくら無能なリーダーの交代を願っても、それは抗いようのない運命なのだ」

「う、ぐ……くそっ！」

「え、今俺さりげに失礼なこと言われた？」

絶望し床に崩れ落ちるグリーンに、小声でブルーにツッコむレッド。

「まあまあ、別にいいじゃないか。どうせリーダーなんて形だけだろ」

ドドメ色が明るく笑う。名前に似合わず爽やかな笑みだ。

「だな。それにリーダーになると、掃除当番も一回多くなってしまう」

つまらなそうに付け加えるブルー。それを聞いたレッドは「そうだっ」と手を叩き、

「そのことなんだけどさ、俺やっぱり不公平だと思——」

「むしろもっと大事なことがある」

ブルーに完全無欠に無視される。憐れな奴だな。ざまあみろ。

「大事なこと？ 何だよそれ」

地味な絶望から回復したグリーンが、椅子に腰掛けながら聞き返す（本当は机に座ろうとしたのだろうが、生憎どこぞの鉄拳にやられてご臨終していた）。

「この戦隊の名前についてだ。そろそろ改名した方がいいと思うんだが」

「えー？ なんてだよ。せっかく俺が名付けたのに」

ブルーの指摘にドドメ色が口を尖らせる。どうやら戦隊名を付けたのはドドメ色だったらしい。

「いや、そこは確かにブルーの言う通りだぜ」

先ほど無視され少し悲しそうな面影を残していたものの、レッドがブルーに賛同する。

「俺も同感だな。ドドメ色、俺達のチームは何人だ？」

グリーンも顔き、ドドメ色にそう問いかける。ドドメ色は一瞬ひるんだものの、一応すぐに答えを返した。

「え、あの、四人だけど」

「んで俺らの戦隊名は？」

「ファイブレンジャー」

「どう見てもおかしいだろっ！ なんだよ四人でファイブって！」

「だって、前は五人だったから」

「それはピンクがいた時の話だろ。あいつはもう脱退したんだ！」

グリーンがそう言った時、ブルーが複雑そうに顔を歪めるのが確かに見えた。ピンク脱退の理由がブルーとの不仲という噂は、どうやら本当だったらしい。

ブルーがピンクの話題を避けるように、ため息とともに言葉を吐き出す。

「名前が矛盾し過ぎだ。これでは故意に偽ったと受け取られてしまう。訴えられれば裁判で勝ち目はないな」

「じゃあ一人補充しようよ」

ドドメ色が軽いノリで提案すると、その他三人が同時にため息を吐いた。文字通り息が合っている。

最初に反論の言葉を返したのは、三人の中で最も呆れた顔をしたブルーであった。

「ドドメ色。その発言は、該当者の見つかる確率を、きちんと考慮に入れてのものなんだらうな？」

「それにたとえ該当者が見つかったとしても、戦隊に入ってくれるかどうかは、また別問題だろ？ 強制はできないんだぜ」

続けるレッドに、ドドメ色はのほほんと、こう返した。

「んー、もう適当に、そこいらの通行人に声かければいいんじゃない？ 案外該当者じゃなくてもイケるかも」

なんという発言か。私でも無理だと分かるのに、馬鹿すぎる。グリーンもそう思ったようで、少しばかり見下した目でドドメ色を見返した。

「んなことできたら苦労しねーよ。無理無理。やっぱ名前の方変えよーぜ」

「分かんないだろそんなこと。俺ファイブレンジャーって名前気にいってるんだよ。なあ、入れようよ新隊員」

「だめだ」

「そこをなんとかっ」

ドドメ色がしつこく粘り続ける。いい加減うざい。個人的にはピンクが残り、ドドメ色に脱退して欲しかった。ピンクは女の子だし、可愛い。しかしドドメ色は男の上に見た目が地味すぎる。というより、なんでドドメなのか。普通イエローとかだろ。チョイス明らかに間違ってる。

そんなことを考えている間にも、ファイブレンジャーは隊員補充について色々と議論を交わしていた。他人が議論している様は見ていると鬱陶しいが、だからといって任務を放棄するわけにもいかない。まあ兄のこともあるし、放棄する気はさらさらないが。

ピー、ピー。

……ボスからの呼び出しだ。そうなればどんな時でも帰還しなければならず、無論ここに残る訳にはいかない。私は小型ディスプレイを抱えると、ゆっくりと立ち上がった。

私の潜んでいた天井裏は、ディスプレイが放つ光以外に光源はなく、薄暗い。だからきっと気付かなかったのだろう。

私はうっかり脆い部分を踏んでしまったらしく、突然天井裏の床が抜けてしまった。もちろん、私自身も重力に従って落下した。敵であるファイブレンジャーの集う場へと。

「っ！」

数メートルの落下など日常茶飯事とはいえ、それでもやはり、痛いものは痛い。私が落下の衝撃に耐えていると、ファイブレンジャーが口々に声を上げた。

「お前はっ」

「テレット星人ワルモン！」

正確にはその弟だが。兄はお前たちのせいで全治十カ月だ。

「でも、なんでここに？」

「どうやら、こいつで俺たちを監視してたみたいだな」

敵の突然の出現にも動じず、ブルーがこちらのディスプレイを指差してきた。

しまった。

私の頬を汗が伝う。

「で、では私はこれで」

無理やり笑みを浮かべ、場を去ろうと立ち上がるが。

「待てよ」

「まさかこのまま帰れるとは、思っちゃいねえよな」

レッドとグリーンが、やけに息の合った動きで通せんぼをした。

……ユガンダ様、申し訳ありません。この観察記録は提出できそうにないです。兄さん。私はきっと、全治十三か月になると思う。

アルモン

[戻る](#)